

あったが、第二層の発達はいくつか。ゲラダヒの頬骨下顎筋第一層と第二層は極めて発達がよく、その第二層の腱は頬骨下顎筋溝上に頬骨下顎筋を発達させる。

普通、側頭筋が頬骨弓をくぐる部分の前端には、脂肪塊が認められるが、シアマンガでは、ここに軟かい横走筋がつまっている。型通りに表層筋の三層を除くと、頬骨弓内側面腹側から上顎下顎筋が垂下し、その後方に、深層筋の前部と後部があり、後部の内側に同第二層が発達する。ここで、頬骨弓を切除し、最初にのべた不明筋を反転すると、上顎下顎筋の内側に、強大な頬骨下顎筋第一層が発達し、その強い腱の上に浅側頭筋がたれさがらる。これを除くと、頬骨下顎筋第一層が、深側頭筋の前部1/4の上に拡がっている。はじめ不明筋と称したものは、この段階で、頬骨下顎筋第二層と判定される。これは、深側頭筋の停止腱の下をくぐり、後臼歯面の延長上に停止するらしい。はじめ、この筋は垂直に上昇して、眼窩後壁背縁に達し、眼窩上層の形成に与ったらしいが、深側頭筋の前縁が強力にせりだしたため、追い出され、やむなく、頬骨弓背縁にそい、浅側頭筋の上を、後方にのびたものらしい。これは珍らしい例とおもう。

以上から、頬骨下顎筋第二層は、眼窩上弓の発達には不可欠の条件であることが明かとなった。「中間型」の追加例が発見できなかったことは残念である。

シアマンガの例は第20回プリマーテス研究会で発表した。

ニホンザルおよびアカゲザルの血液凝固・線溶に関する研究¹⁾

鈴木 宏治 (関西医大)
江川 宏 (同上)
橋本仙一郎 (同上)²⁾

血栓症あるいは血管内凝固症候群など血管内での血液凝固・線溶系の異常を原因とする疾患に対して、各種小動物を用いて実験的疾患の惹起あるいは治療法確立の試みがなされてきた。しかし種差による凝固・線溶系の差異は常に大きな問題であり、この点において霊長類動物の利用は大いに期待できるものである。

本研究はニホンザル(60頭)およびアカゲザル(10頭)の血液について正常時における凝固・線溶系を観察し、ヒトとの比較検討を行い実験的疾患惹起のための基礎たらんとした。

凝固系については、若干ではあるが fibrinogen の低

- 1) 本研究の結果は、第4回、血栓および止血に関する討議会(50年11月、東京)にて発表した。なお現在、雑誌「血液と尿管」に投稿中。
- 2) 現在の所属：三重大、医

値および antithrombin の高値がみられ、これが原因と思われる thrombin time の延長が認められた。しかし prothrombin time および partial thromboplastin time はヒトの場合とほとんど等しく、凝固系全般的にはヒトと極めてよく似ていることが明らかになった。

線溶系については plasma lysis time, euglobulin lysis time においてヒトの場合と異なり著しい延長傾向がみられた。また plasminogen 値は、ヒトに比較して有意に ($P < 0.01$) 高値を示した。plasmin inhibitor についてはヒトの場合と差はなかった。plasminogen activator, free plasmin 活性および fibrinogen (fibrin) degradation product (FDP) は採血時過度のストレスを与えたと思われる数例に多少認められた以外、大部分のサルには全くみられなかった。これらの結果からサルの線溶系はヒトに比較して線溶予備能力は大きいが全般的には強く抑制された状態、換言すれば線溶現象の発現しにくい状態であることが明らかになった。

一方、ヒトの plasminogen は streptokinase と complex を作ることににより極めて強い plasminogen activator 活性を生ずるが、サルの plasminogen には streptokinase の添加でも activator 活性の発現はほとんど認められず、plasmin 活性として観察されることが示された。

以上のことから、サルとヒトでは凝固系には差異はないが、線溶系ではかなりの動態の差が存在することが明らかになった。この結果を考慮しつつ、今後の実験的血栓症惹起等の研究に進展させたい。

ニホンザルの方略行動に及ぼす変型 SRT の転移効果

小牧 純爾 (金沢大・法文)

連続弁別逆転訓練 (SRT) の変型を2種考案、それぞれの訓練をうけたニホンザルの2試行課題およびLS課題における遂行を吟味することにより、方略行動の学習機構の解明を試みた。

6頭のオスのニホンザルをP群とN群の2群に分け、予備訓練ののち、20逆転からなる変型SRTを3ブロック、計60逆転にわたって与えた。訓練装置はWGTA、刺激体は日本モンキー・センターの保有のストックから選んだ。126個(63対)、報酬は干しぶどうまたはピーナッツである。両群には、通常のSRTと異なり、各逆転の開始前PまたはNの情報試行を3試行附加的に与えた。つまり、次の逆転の正刺激を1個提示し反応を強化する(P群)か、次逆転の負刺激を1個提示し反応を強化しない(N群)かの情報試行のあとで逆転訓練に入る。逆転訓練は1日45~51試行、連続10正反応をもって逆転